

# ハンドベルの研究 I

— ハンドベル及び金城学院大学におけるハンドベルクワイアの歴史 —

A Study of The English Handbell I

—The History of the English Handbell and the Kinjo Gakuin University Handbell Choir —

磯部 澄葉

Sumiha ISOBE

## 1. はじめに

子どもから高齢者まで年齢を問わず演奏を楽しむことができるハンドベル。ハンドベルが日本(金城学院)に伝来し、日本初のハンドベルクワイアが金城学院中学校で結成されてから、今年でちょうど40周年を迎える。近年では、教会をはじめ、コンサートや結婚披露宴での演奏楽器として用いられている他、幼稚園、養護学校、高齢者介護施設、病院など、教育や音楽療法を目的とする楽器の一つとしても活用されており、日常生活の中でもハンドベルの音を耳にする機会が多くなりつつある。しかし、ほとんどの人がハンドベルの構造や歴史、演奏法を把握することなくハンドベルの演奏に接しているのが現状である。筆者もその一人であった。筆者が通っていた中学では朝の礼拝や文化祭、クリスマスシーズンなど、ハンドベルクワイアによる演奏を頻繁に聴く機会があったが、「オルゴールのような音で癒される」「大勢で演奏して楽しそう」というイメージを持っていた程度で、ハンドベルの楽器としての知識はほとんど理解していなかった。しかし、ハンドベル講座への参加やハンドベルの構造・歴史を調べていく中で、チーム全員が力を合わせて1曲を作

り上げる演奏の楽しさや難しさ、またハンドベルの奥深い歴史の流れを知り、ハンドベルに魅了されたことが本論文を書くきっかけとなった。

高齢者が増加する現代社会において、簡易楽器として開発されたハンドベルの普及がめざましく、音楽療法の現場では必ずと言ってよいほど常備されている。ハンドベルが特に音楽療法の現場に普及していったのには、楽器の特質が療法の要請に合致したからと考えられる。まず、軽く振ることで一定のピッチが出るため、高齢者や障害のある人にも扱い易い。また集団で一つの旋律を奏でることにより、協調性や社会性の育成や維持、あるいは回復が期待できる。そして自分の音を把握するという認知に直結した活動であるため、認知機能の育成、維持の効果が期待できる。これらの特質は療法のみならず、教育の要請にも通じるところがある。これらの理由はいずれもハンドベルという楽器の機能的側面に着目したものにすぎないが、音楽性という点ではどうなのだろうか。音楽療法は本来、楽曲や楽器の音楽性を通してクライアントを触発し、治療をしていくものである。この原則論に立てば、ハンドベルを用いた音楽療法は、

ハンドベルの音色や振る動作がクライアントに心地よくフィードバックされてはじめて治療効果をもたらすと言えよう。また教育現場においては、振って音を出すという単純な行為から、どんな音を出したいかという音色の探究へと発展させたいのは言うまでもない。

しかしながら、現実には音楽性を意識したハンドベルの実践はごく一部の指導者に限られている。その最大の理由は、日本でのハンドベルの歴史が浅く、教師やセラピストがベル本来の音楽的特質や奏法を学ぶ機会が限られてきたためではないだろうか。もっとも一般教育や療法の現場において本格的なハンドベルを導入することは難しいが、簡易楽器であってもハンドベル本来の魅力を取り入れた導入が少しでも現場で増えていくことを願いたい。

そこで本論文では、ハンドベルの歴史や演奏法、また今年で35年目を迎える金城学院大学ハンドベルクワイアの活動を紹介します。ハンドベルの魅力を探るための一助となれば幸いです。

## 2. ハンドベル誕生の背景

ハンドベル発祥の地はイギリスである。ヨーロッパの中でもとくにイギリスは早くから塔の建築と鐘の製造技術が発展し、10世紀頃から多くの塔楼が作られた。塔の上には鐘（タワーベル）が置かれ、時報や警鐘を知らせる役割を果たしていた。鐘の製造技術が発展すると共にタワーベルの鳴らし方も発展し、15世紀に入ると鐘を鳴らす順番を定めたシステム、「チェンジ・リングング」<sup>1)</sup>という一つの形態が誕生した。

チェンジ・リングングは、初めに全ての鐘を高い音から低い音へと順番に等間隔で鳴らし、続いてベルの鳴らすタイミングを各々音分ずつずらしていき、最初の配列に戻った

ところで、一回の演奏が終了となる（図1参照）。

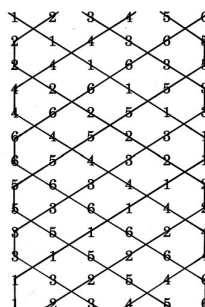


図1

上記のようなチェンジ・リングングのルールに沿って演奏するには練習が必要となり、17世紀にその練習用として取っ手（ハンドル）のついた小型のベルが考案された。その小型のベルが現在のハンドベルであり、正式名称を「イングリッシュハンドベル」という。後にイギリスでは村ごとにハンドベルのチームが出来た。1840年頃にはベルの演奏を行うイギリスのハンドベルバンドがアメリカ合衆国東部で活躍したことをきっかけとしてアメリカでも盛んに演奏されるようになり、教会を中心に改良を重ねながら発展していった。

アメリカでの最初のハンドベルチームは、1895年ボストンでアーサー・ニコルズ氏の手により結成された。20世紀前半には、彼の娘であるマーガレット・シャークリフ氏が、ニューイングランド地方（アメリカ合衆国北東部地域）に十数のチームを結成したことを機会に演奏楽器としてハンドベルが繁栄し、1954年には「全米イングリッシュ・ハンドベル組合」が創立された。現在は1万人の奏者を抱え、1000を超える団体数が組合に所属しており、定期刊行物まで出版している。ハンドベル発祥の地であるイギリスの「英国ハンドベル連盟」は1967年創立であることから、ハンドベ

ルを演奏楽器として広めたのはアメリカと言っても過言ではない。

日本には1970年頃名古屋の金城学院中学校をはじめ、東京の教会などに初めてハンドベルが伝わり、同年、日本で初めてのハンドベルクワイアが金城学院に結成された。その後ハンドベルは各地に広まり、1976年11月には「日本ハンドベル連盟 (HRJ)」が設立され、現在日本には600程のハンドベル団体が存在するまでに拡張した。これはアメリカ、イギリスに次いで3番目に多い加盟数である。

アメリカ・イギリス・韓国・カナダ・オーストラリアなど、ハンドベルが普及している国との世界規模での交流を目的として、1984年以降より2年に一度ハンドベル世界大会が催されている。大会では音楽面での研究発表のみならず、ハンドベルによる音楽療法などの実践的な問題についても取り上げられている。

### 3. 金城学院におけるハンドベルクワイアの歴史

金城学院のハンドベルのグループ名称にクワイア(聖歌隊)と名付けられているのには、「声を出して歌うのではないけれど、心の中で神様を賛美しつゝ、礼拝に奉仕する」(坂野, ハンドベルクワイア ハンドブック, 1981, 2頁)という想いが込められている。

1962年当時、金城学院中学校で音楽宣教師をされていたマール・アーウィン・ケリー (Mr. Merle Irwin Kelly) 先生が一時的にアメリカに帰国された際、とある教会の礼拝でハンドベルに出会い、その魅力に惹かれ、その後教会の支援を受けてハンドベルを購入されたことが、金城学院におけるハンドベルの歴史の最初とされている。その背景にはフロウ夫人の存在を忘れてはならない。1970年、当時89歳であった彼女は前々から日本万国博

覧会(通称:大阪万博)の見学を兼ねた日本旅行の計画を立てており、旅行代を貯めていた。しかし日本の子供達のために用いる方が有意義と考え、日本旅行を断念してケリー先生にその旅行代を託したのである。フロウ夫人の心温かい支援がなければ、今日のような金城学院のハンドベルは存在しなかったかもしれない。金城学院におけるハンドベル立ち上げの際、懸命に力を尽くしてくださった方々に感謝する心を日頃忘れがちであるが、ケリー先生・フロウ夫人をはじめ、これまで金城学院のハンドベルを支えてくださった多くの方々に、ハンドベルを愛好する一人として心より感謝を申し上げたい。

金城学院中学校に初めてハンドベルが届いたのは、1970年8月24日のことであった。同年、9月には日本で初めてのハンドベルクワイアが金城学院中学校に設立され、現在は、中学校、高校(1973年結成)、大学および短大(1976年結成)、幼稚園(2008年結成)にそれぞれ活動の拠点を置き、活発に演奏活動を行っている。その他、金城学院卒業生により結成されているケリーベルクワイア(1984年結成)、PRIME(1991年結成)、みどり野ハンドベルクワイア(1996年結成)の3つのハンドベルクワイアも盛んに演奏活動をされている。また卒業生たちが中心となり、地域の人々と共に結成されているハンドベルクワイアも増えつつある。

### 4. 金城学院大学ハンドベルクワイアについて

金城学院大学ハンドベルクワイアは毎年約25~30名(1~4年生)の部員数から成り立ち、基本週2回<sup>1)</sup>、大学内にあるキリスト教センターにて練習(朝・授業後)を行っている。練習は、1・3年生と2・4年生の2グループに分かれ、上級生が下級生を指導しながら日々の

練習に励んでいる。その練習風景ではピンと張りつめた緊張感漂う雰囲気、ハンドベル演奏にかける一人一人の熱い想いが伝わってくる。上級生からは下級生を本番に向けて上手く引っ張り上げていく責任感の強さやプロ根性を感じ取られ、下級生は上級生を目標に懸命に練習に取り組む真剣なまなざしが印象的である。本番間近になり、顧問をされている吉田年一氏が指揮及び指導にあたられると、その緊張感はさらに増し、部員の集中力も頂点に達する。まさに「ハンドベルに人生をかけています」と言わんばかりの意気込みである。このような日々の厳しい練習の積み重ねがあるからこそ、素晴らしい演奏へと繋がっているのであろう。また、演奏時の大人顔負けの風貌と、演奏を放れた時の彼女たちの無邪気な笑顔とのギャップも魅力である。以下、2009年度・金城学院大学ハンドベルクワイアの活動を記載する。

<部員数>

計25名 (1年生：3名, 2年生：7名, 3年生：7名, 4年生：8名)

<年間活動>

2009年

- 5月 春の伝道週間 昼の礼拝にて演奏
- 6月 朝の礼拝にて演奏／第17回中部フェスティバルに出演 (中部学院大学)
- 7月 金城学院幼稚園ハンドベルクワイアミニコンサート 賛助出演／昼の礼拝にて演奏／金城学院大学オープンキャンパスにて演奏
- 8月 第33回ハンドベル夏期講習会 3泊4日 (箱根高原ホテル)／金城学院大学オープンキャンパスにて演奏
- 9月 ハワイ演奏旅行 6泊8日 (ハワイ大学にて演奏／アラモアナショッピングセンターにて演奏／ハリス合同メソジスト教会にて演奏)
- 10月 朝の礼拝にて演奏／金城学院創立120周年・金城学院大学設立60周年記念

卒業生・在学生・在校生・在園生による記念演奏会に出演 (ランドルフ記念講堂)

- 11月 秋の伝道週間 昼の礼拝にて演奏／第33回全国フェスティバルに出演 (神戸文化ホール)／朝の礼拝にて演奏／クリスマスツリー点灯式にて演奏
  - 12月 第20回クリスマス・ハンドベル・コンサート (愛知芸術劇場コンサートホール)／金城学院大学+同志社女子大学 合同説明会にて演奏(ミッドランドスクエア)／大学クリスマスにて演奏(ランドルフ記念講堂)／金城学院幼稚園クリスマス礼拝にて演奏(ランドルフ記念講堂)／セントレアクリスマスコンサートに出演(中部国際空港)／金城学院高等学校定期演奏会 賛助出演 (ウィルあいち)
- 2010年
- 2月 卒業コンサート (電気文化会館ザ・コンサートホール)

5.ハンドベルの構造

ハンドベルは銅80%、錫20%の合金でできており、鐘の内部にあるクラッパー(鐘を叩く舌)は一方向にだけ往復するよう作られている。音に関しては、一回の振りで一度のみ鳴るようできており、連続して音が鳴り続けないようクラッパーに工夫が施されている。また音程が狂うことがないため調律の必要がなく、大切に扱えば100年でも使い続けることが可能であるが、指紋から鐘が錆び音程が変化してしまう可能性があるため、リングアは必ず手袋を身につけなければならない。

ハンドベル製造メーカーとして歴史ある著名な会社は4社<sup>3)</sup>あるが、とくにイギリスのホワイトチャペル・ベル製造所は16世紀後半からベルを作り続けており、現在に至ってもなお重要なハンドベル製造所である。日本では主に、アメリカのシュルメリック社(黒のハンドル)ならびにマルマーク社(ピアノ鍵盤同様の白と黒のハンドル)のハンドベルが使用されている。金城学院中学校に最初に届い

たハンドベルはシュルメリック社の3オクターヴ37個のベルであった。日本国内では株式会社プリマ楽器が2007年より日本で唯一製造を行っている。2007年に25音、翌年の2008年に32音のハンドベル<sup>iv)</sup>を発表した。現在ではG4~G6までの2オクターヴ(25音)および、C4~C7までの3オクターヴ(37音)が基本のセットとなっており、音域の幅を少しずつ広げている。今後ますますの製品開発に期待したい。ハンドベルの総譜の書き方としては、チェンジ・リング(図1参照)のように数字を使用する方法、トニック・ソルファ記譜法<sup>v)</sup>に従い文字を用いる方法など様々であるが、やはり一般的には五線譜による記譜法がよく使われている(図2参照)。またハンドベルは記譜されている音よりも実音は1オクターヴ高くなるため、A4が440Hz(または442Hz)に調律されている。音域は3~5オクターヴのものが一般的であり、音量は音域が高くなるにつれて僅かながら大きくなり、重さは低くなるにつれて重くなる。0.2~3kgの重さが一般的であるが、大きいものでは約7~8kgのハンドベルが存在し、金城学院は30年以上も前より直径35cm、高さ40cm、重さ7kgのハンドベルを持っている。このように世界最大級のハ

ンドベルを所有している事実からも、金城学院の日本におけるハンドベルの歴史の深さが窺えよう。

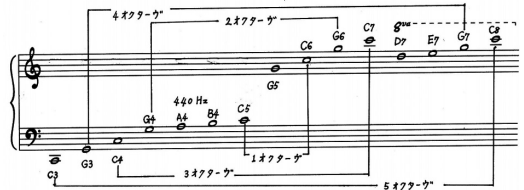


図 2

### 6.ハンドベルの主な奏法

上記ではハンドベルの歴史について記述してきた。では実際にリンガーはどのような奏法を用いて演奏しているのだろうか。「ハンドベルを手に持ち、前に振り出して音を鳴らす」という基本動作は想像できても、その他の奏法については一般的にはあまり知られていない。

そこで本論文では、以下にハンドベル独特の主な奏法を7つ取り上げる。(図3参照)

図 3

【奏法名】	【奏法】
リング/Ring	ベルを真直ぐ立てた状態で、下からすくい上げる様に円を描いてまわし、肩や胸の辺りで軽く触れ、響きを止める <sup>vi)</sup> 基本奏法。五線譜上での記号：「R」もしくは、記号のない音符はリングで演奏。
ブラック/Pluck	スタッカート奏法。低音でよく使用され、ベルを寝かせてクラップパーを持ち、はじく様に下に打ちつけて音を出す。五線譜上での記号：「・」
マルテラート/Martellato	ベルを横にして、ベルの下に敷いてあるマットにベルを軽く打ちつける奏法。ppからffまでの強弱を出すのに効果的。五線譜上での記号：「▼」

リングタッチ／ Ring Touch	リングをしたあと、素早く音を消す奏法。ブラック(上記参照)とは異なる。五線譜上での記号：「RT」
マレット／Mallet	マレット（ばち）を用いてハンドベルを打つ奏法。ベルを手に持つ場合①とベルをテーブルの上に置く場合②の二種類の方法がある。 ①ベルを手に持った状態で打ち、主に美しい和音の響きを出すときに使用される。五線譜上での記号：「+」 ②ベルをテーブルの上に置いた状態で打ち、速い細やかなリズムの時に効果を発揮する。五線譜上での記号：「Mal」もしくは「+」
スウィング／Swing	リングの後に腕を伸ばして体の後方まで振り、その反動で前に戻す奏法。音の響きが変化し、音の揺れが感じられる。この奏法は、ハンドベルの原点であるタワーベル <sup>1)</sup> の響きに一番近い。五線譜上での記号：「SW」もしくは「↓↑」
シェイク／Shake	ベルを前後に細かく振って音を連続して速く鳴らす方法。曲の盛り上がりや華やかな場面でよく使用される。隣り合った二つの音を交互に、又は同時にシェイクするとトリル(tr)になる。五線譜上での記号：「SK」「~~~~~」

上記の他にもハンドベルには様々な奏法があり、リンガーは一曲の中でもいくつかの奏法を使い分けて演奏している。とくにハンドベルの演奏上の難点は、素早い奏法の変化と、個人とクワイア全体との音のバランス加減である。例えば基本のリングからブラックやマレットに奏法を変える際など、動作の全く異なる奏法が頻繁に出てくる曲は、その動作に慣れるのだけでも大変である。下記にある図4の楽譜は、タンゴの名曲『Jalousie (J. ゲーデ作曲)』のメロディー部分と伴奏パートの一部分を抜粋したものである。C5の演奏パートを参照していただくと、いくつかの奏法を使い分けながら演奏されていることがうかがえる。また、メロディラインを数人で担当するため、メロディーの繋がりや強弱などをいかに上手く繋げるかがクワイアの腕の見せ所でもある。曲の全体を把握し、客観的に聴く耳を持って冷静に判断しながら演奏することが重要な点においては、他の楽器と

も共通しているといえよう。

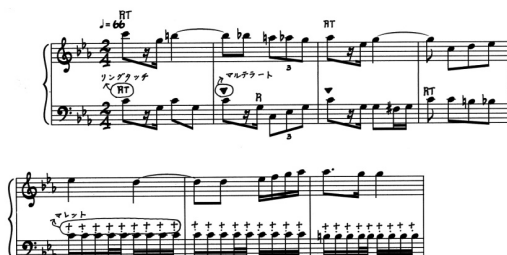


図4 『ジェラシー Jalousie (抜粋)』

## 7.日本におけるハンドベルの種類

日本には3種類のベルがある。イギリスから伝わった本来のハンドベル(イングリッシュハンドベル)と、容易に演奏できる教育楽器として日本で考案されたミュージックベル及びトーンチャイムである。これらは元々ハンドベルの簡易楽器として作られたもので、とくにミュージックベルはハンドベルと形が似ており、ハンドベルの導入としてよく利用さ

れている。近年では教育楽器のみならず、コンサートやライブでのパフォーマンスとしても演奏されている。(図5参照)



図5 M.B.club (a New Year Concert,千種文化小劇場,2007)

上記の画像は、名古屋を拠点として活躍されているミュージックベルの第一人者であるKEIKOさん率いるM.B.club<sup>(注)</sup>の演奏風景である。幼児や高齢者、また障害者の方などにも比較的演奏しやすい楽器として考えられてきたミュージックベルであるが、KEIKOさんはミュージックベル独自の奏法を考案した。パフォーマンスとして演奏する際は、一人あたり27本のミュージックベルを机の上に並べて担当し、4人で演奏するのが基本スタイルだ。ハンドベルに比べ、音の伸びが短いため、速い曲を演奏するのに適している。また、ミュージックベルはベルの大きさが低音から高音まで同じという点でもハンドベルとは大きく異なるのが特徴である。ハンドベルの簡易楽器ということのみならず、一つの楽器として確立しつつある。

## 8.まとめと今後の展望

本論文では、ハンドベルの歴史や楽器の特質、奏法について触れ、また金城学院におけるハンドベルを中心にハンドベルの魅力を簡潔ではあるが紹介してきた。金城学院大学ハンドベルクワイアをはじめ、金城学院高等学

校、金城学院中学校、金城学院幼稚園、金城学院卒業生によるハンドベルクワイアの演奏を観察していく中で、金城学院におけるベル演奏は演奏者の年代によって音色が異なることに気が付いた。高校生以下の演奏は若さあふれるフレッシュな響き、大学生の演奏はテクニックに優れ、金城学院のモットーである「強さ」と「優しさ」を感じさせる透明な響き、そして卒業生による演奏では気品あふれる豊かな響きである。

金城学院大学ハンドベルクワイアでは、とくに4年生になると一人一人のハンドベルに対するプロ意識が高くなり、ほとんどの部員がほぼ毎日積極的に自主練習に取り組んでいる。ハンドベル本来の美しい響きを追究することを通して、認知力、集中力、持続力、適応性の育成に役立っていると考えられる。一方、みどり野ハンドベルクワイアでは、メンバーそれぞれが学生時代とは異なる環境にいるが、ベルの練習を通して懐かしい友人たちと一つのものを作り上げる目標を持つことで、練習の間は各自の仕事や家庭のことから放れ、学生の気分に戻ってハンドベルに没頭している様子が練習の中で窺えた。学生時代の長い年月を共に過ごした強い絆が演奏にもよく反映されているのが感じ取れる。卒業生にとってハンドベルを演奏することは、上記<sup>(注)</sup>の育成や認識のみならず「人生の生きがい」にもなっているであろう。

また、ミュージックベル及びトーンチャイムは元々ハンドベルの簡易楽器として開発された楽器であるが、M.B.clubの演奏活動により、簡易楽器であっても本格的に音の響きを追究して演奏することの可能性が明らかになった。本論文の初頭に記述したような「楽器の響きが演奏者に快としてフィードバックされて演奏自体を楽しむことができ、それが結果的に機能や認知のリハビリに繋がる」という

音楽療法による音楽性の問題も、本格的なハンドベルに限らず可能であるということが認識でき、問題(音楽性)の解消を可能にする幅が少しは広がったのではないだろうか。

今後、福祉工場や幼稚園などのハンドベルサークルにおける実践の観察を通して、ハンドベルのよりよい導入をめぐる考察を続けていきたい。

#### 〔付記〕

本論文作成にあたり、ご助言をいただきました金城学院大学南曜子教授、取材ならびにインタビューを快くお引き受けくださいました金城学院高等学校ハンドベルクワイア顧問の鎌井泰先生、金城学院大学ハンドベルクワイアの皆様、みどり野ハンドベルクワイアの皆様に、心より感謝申し上げます。また、ミュージックベルのお話をお聞かせ願いましたKeikoさんに、心より厚くお礼申し上げます。

#### 〔参考文献〕

坂野延子責任、金城学院高等学校ハンドベルクワイア、『ハンドベルクワイア ハンドブック』(1981), 1~10頁.

日本ハンドベル連盟20年史編纂委員会発行、『日本ハンドベル連盟20年の歩み』(1996), 精文堂印刷株式会社

柴田南雄・遠山一行総監修、野間佐和子発行、(株)第一出版センター代表 加藤勝久編集、『ニューグローヴ世界音楽大事典』(1994), 講談社, 第10巻 チェンジ・リングング, 452~453頁.

柴田南雄・遠山一行総監修、野間佐和子発行、(株)第一出版センター代表 大竹勝五郎編集、『ニューグローヴ世界音楽大事典』(1996), 講

談社, 第14巻 ハンドベル, 37~39頁.

柴田南雄・遠山一行総監修、野間佐和子発行、(株)第一出版センター代表 大竹勝五郎編集、『ニューグローヴ世界音楽大事典』(1996), 講談社, 第16巻 ベル, 285~294頁.

- 
- i) たくさんのタワーベルのうちあらかじめ使用するベルの数を決め、各鐘楼のベルを一人ずつ受け持つ。ルールに従って鳴らす順番を次々に入れ替え、最終的に初めの音の配列に戻る一連の流れの組み合わせを示す。一回の演奏の中で、同じ音列が再度現れることは禁じられている。
  - ii) 練習は基本週2回と決まっているが、ほとんどの部員がほぼ毎日自主練習に励んでいる。
  - iii) イギリス, オランダの各1社および、アメリカの2社を示す。
  - iv) そのハンドベルは「アブリハンドベル」と呼ばれ、田代哲之氏により開発された。
  - v) 『…D R M F S L T | d r m f s l t | d' r' m' f' …』・・・「|」は小節線を表す。  
また「#」の場合は「e」, 「b」の場合は「a」が付く。例: 「#」→d e, r e / 「b」→d a, r a。
  - vi) 音の響きを止めることを「ダンプ (Damp)」という。
  - vii) タワーベルはベル本体が回転して音が出ているため、ハンドベルの「スウィング」の奏法ではタワーベルとよく似た響きが出る。
  - viii) M.B.clubの結成期間は1998,06~2007,03。現在K EIKOさんは、2008年より「M.B.club ミュージックベルスタジオ」を設立し、ミュージックベルのテクニックをはじめ、メンバー全員の心をひとつにして奏でる喜びやミュージックベルの素晴らしさを伝え続けている。
  - ix) 認知力, 集中力, 持続力, 適応性の育成。